

〔道成寺型付〕

〔原装の共表紙に「道成寺」と外題打付書〕

道成寺

- 一 鐘の鐘のうち所、舞臺へ左りの折目の上のむなぎに打なり。一 鐘の中の道具の事、へ赤頭、へ打杖、へ鏡鉢、へ般若面、いづれもそとへ見へぬやうによくした、め置也。
- 一 僧ワキ三人、へ水衣、へ大口、へこし帯、へ沙門帽子。へ扇右に、へ珠数左りに持。又かへ珠数一れん、たもとに入る物なり。
- 一 ツレ僧、へ扇こしにさし、へ珠数右に持。一切能につれはかくのごとし。
- 一 太夫、面へふかひ、又はへしやくミ。へ小袖ぬぎかけて、へうわぎの小袖のこずまをへこし帯にはさむ。へ扇右に持。

ワキ へ名のり謡。此間文句ヌク 女人禁制のよしをかたく申付候べし。

へしか、有て、轆の事、へワキのいづるをみて大小かゝる。鐘つりて、笛ひしぎ、次第打。

シテ次第 常のごとく大つゞミのかたへ向 へつくりしつゞミも へ地返しの内正向 へ是は此国のかたはら

シテにしの方を見る。但舞臺による へ月は程なく入しほの

むなり。

△あし遣ひのやうすの事

一ニつまさきにて二段にすり出す。然間爰ハ靴一ニツ重る。

三ニこゆびのよこはらにてふむ。

八ニ三番目と同。



五ニすり引時ハ靴うたず、ふみしむる時ニ打也。是、乱拍子の秘事也。

六ニかしら也。七ツ目へ引付て重る。

七ニ又ツミぽと一ツ打、足すり出す。

四ニ大ゆびのよこはらにてふむ。

九ニ四番目と同あしなり。

十八きびすにてふみしめ、それより左足へ程の拍子にて移りて、又右足のごとくふむなり。

一ニさいの能に、左りへまわるを順とし、右へまはるを逆とす。然ば、此足順に左りへ大まはりする内に、頭数一拾八踏。十八めの頭にかゝる時たつぱいをして、かしらと共につれて扇を左りへとりわたし、左りにて扇をよこになし、目のとをりまでさし上、則一和哥をうたふ也。此和哥の内に逆にまはるもよし。又そのま、正面へふみ出ルもよし。

一 〱三段、まん中にて〱そりかへり也。

常のごとく上はの扇

〱春の夕部をきて見れば、入あひの鐘に、花やちるらん、たいはいに出る、さる程に、さしまハす扇、てらぐのか

ね、月落鳥啼て、しもゆき天に、みちしほ程なく、日高の寺の、ワキ正面のかたをさし江村の漁火、うれひにたいして、やがて左足引

人々眠れば、よきひまぞと、立まふやうにて、ワキを見るねらいよりて、扇のかなめのかたにて鐘つかふとしてつかんとせしが、おもへは此鐘、鐘をさ

うらめしやとて、りうづに手をかけ、飛とぞ見へし、引かづきてぞ、うせにける鐘へ入てあしびやうし

△此鐘入、古しへよりさま、(ぐ)有事也。まづ両のゆびをすぐにひろげたるは悪敷候。物などつかむ

手もとのやうに、すさまじく、つよぐととり付べし。扱、〱そのま、飛入もよし。〱鐘をま

わしてまハリ入にもよし。いづれも、身かろく、姿を見せぬやうに、かるぐと入を手がら

とす。先鐘をつり上たる時ハひきくつるなり。是は鐘の中にした、めおきたる道具をみせまじ

き理也。扱、太夫のまふ時ハ、ゑほしにつかへざるやうにたかく上、太夫鐘を見入る時ハうご

かしさげて、飛入ときはひきくさげ、〱謡の「見えし」と言ことばを約束にして鐘をおろすな

り。あまり急にもおろさず、只するくとおろす事、大事なり。

〱しかぐ有て、扱〱ワキの物語の内、太夫別なる事なし。〱ワキの習さまぐあれども、書あ

らハしがたし。

ワキ
小ツミ、たぶぼくと打てかゝる

此間ワキツレとも掛合ヌ

何のうらみかありあけの、つき鐘こそ笛少色えて鐘うごかす 太こ頭より打出す。又半頭も

すハくうごくぞ祈れたゞ、く、ひけやてんでに、千手のだらに、不動の慈救のげ、明王の火

焰の、くろけぶりをたて、ぞ祈ける、祈りい爰にて鏡鉢ならすのられ、つかねど此鐘、ひゞきいで、ひか鐘をうごかすねど此か

ね、おどるとぞ見へし、ほどなく鐘楼に、引上たり、あれ見よ蛇たいは、あらはれたり

一 初より小袖をぬぎかけて、其上に又小袖をきながし出る事なれば、鐘のうちにて上小袖をぬぎ

て上にかづき、うつぶして居る也。鐘の上るを見んとするやうに、小袖を両の手にて上る。此時

ハワキしきりに祈るに依て、又小袖にて顔をかくす。扱そろくと小そでをのけて、こしにひき

まき、両のゑりにてもち、右に打杖持て、立ざまにまづ鐘を見上、鐘に執心をなして見るうちに、

左りへまわり立也。ハ鐘より出ざまに、とろくと拍子ふむなり。是を△うろこおとしと号して、

秘傳也。蛇身のわげたまりて、立時尾をとく理なり。ハ又鐘を両の手にてとらへて、引上るを、

とり付あがりて、へたと手をはなし、鐘より落たるやうにするもあり。ハ又小袖をぬぎ、かねを

初から見上て居もよし。いづれのミちにても、祈るわきに一ゑんかまはず、鐘の方に心をうつし

居事、習なりと知べし。

一 ハかけり動は、まづ、ゆふくとして柱のかたへ行、鐘を見かへりみる所を、しきりに祈るによ

り、うとましさうに僧を見て、拂のけるやうに打杖つかふ物也。打てかゝる事にてはゆめくあ

らず。只拂のける分也。扱又、して柱の方へ行内に、小袖をぬぎすつる也。其後、右へふりかへり、僧を拂のけて、又鐘を見る。是二段め也。それより橋が(衍字)りり迄行て、左りへ立かへり、して柱を左りの手にてそとよりさか手にかゝゑ、鐘のかたをのぞき見やる。僧しきりに祈る間、急にはらひのけて、鐘を見やりくなどして、正面のかた方へ行、出るやうにして又ははらひのける内に、鐘にとりつかんとするを、引おとすなり。いづれもむかしより名人色々に動の仕舞をせし事也。

謹請東方青龍清浄、謹請西方白龍白玉、謹請中央黄躰黄龍、一代三千大千世界の、ごうじやの龍王あいミン納受、あいミン自謹のみぎんなれば、いづくに大蛇の有べきぞと、祈り祈られかつ次第くによはりしりぞきばとまるぶがべたとまるぶなり、

きりのいのりに立あがり、拂のけく二度も打て次第くに後よハりに舞なす事、かんよう也。きりのいのりには、鐘に心入べからず。かつばとまるぶ躰、かんようの所也。

またおきあがつてたちまちに、鐘にむかひてつくいきは、

よこにこけたるをおきあがり、鐘のかたにむかひ、両の手を上て、とりつかんとするやうにのびあがり、はたとうつぶす。

ミやう火と成て其身をやく、日高の川波、しんえんにとんでぞ入橋が、りにてとび、ぐわして、左りの足のひざをおり、右のあしをのべ、上へにける、のぞミたりぬとげん爰より立てはしが、りへ行

あげて足のゆびをかゝめて、尾のごとくにする也。是を△臥龍と号
じやたちは、我本坊にぞかへりける、く

一、道成寺の習、此外毛頭なく候。若余にあらば似せ事たるべく候。以上

右道成寺、年月従_二御執心に_一、一子之外相傳有間鋪、神文不_レ疎候之条、家之秘密不_レ残書記、令_二傳受_一候。必々不_レ可_レ有_二他見_一者也。

慶長拾年

竹田今春七郎

乙巳ノ九月三日

秦氏勝(花押)

判凡如_レ此

真嶋慶圓老
参

右真嶋隆徳老傳來書、此度借請書写畢。

野口與市

天明元丑九月

勝延(花押)